

卒業論文の要旨

論文題目	現代アニメーションが解こうとする、世界にかけられた呪い： 米国発 TV アニメにおけるジェンダー、人種、「美しさ」の表象について
氏名	熊崎 陽
メジャー	倫理学
<p>(要旨)</p> <p>我々の世界には、様々な「呪い」がかけられている。例えば、女性は本来か弱い生き物だとか、男は男らしく戦わなければならないだとか、男女の恋愛こそが正常だとか、はたまた、こういった見た目は美しく、こういった見た目は醜いだとか、この世界とそこに生きる人々をがんじがらめにしていく呪いの種類は、あげたらきりが無いほどだ。これらの呪い、すなわち、人々の多様なあり方を否定し抹殺しようとする強固なメッセージは、様々な文化の中で構築され、再生産されることで、より強固で普遍的な価値観として蔓延し、長年に渡って人々の生き方、在り方を一定の枠の中へ押し込み続けてきた。しかし、現代ではこれらの呪いを解こうとしている様々な人が存在する。本稿は、こういった呪いの性質を検証し、現代の米国を中心とする海外アニメーション作品におけるこれらの呪いを解こうとする試みを紹介し、その意義について考察する。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>熊崎さんの論文を読んで最初に感じたことは、「これは書かれるべくして書かれた論文だ」ということでした。熊崎さんは、3年次に私の19世紀イギリスの古典的小説を読むゼミに参加してくれましたが、登場人物の言動について、どうしても理解に苦しむ・・・と常々発言されていました。今回、この論文を読ませていただき、「なるほどそういうことだったのか」と、かつての熊崎さんの様々な発言が一気に腑に落ちる思いがしました。熊崎さんのいう「世界にかけられた呪い」の枠組みは、19世紀イギリス社会において、「家庭の天使」というフレーズに象徴される理想の女性像やジェンダー規範として形成され、近現代の欧米の文化的価値観の根底をなすものとして定着したともいえるからです。</p> <p>主として古典的な近代小説を研究対象としてきた私には、現代アメリカのTVアニメを主な対象とし、インターネット上の製作者へのインタビュー記事やファンの投稿など、幅広いテキストを扱う熊崎さんの論文を指導することは、未知の世界に足を踏み入れる経験となりました。指導という形をとりつつも、多くの知的刺激を与えてもらいました。特に、第3章～4章で取り上げられた作品と主題は、現代のアメリカ社会において、人々の多様性を受容し、この世界を誰にとってもより自分らしく生きられる場所にしようとする動きが、ここまで進んでいるのかと目を開かされるものでした。未だ実現の途上にある、あるべき世界の姿や、それにむけて我々のなすべきことについて考えさせられる論文です。</p>	